

## INTERVIEW

## 83歳のリチャード・タトルが語る「アーティストはどう生きるか」

小山登美夫ギャラリー京橋で個展「San, Shi, Go」が5月17日まで開催中のリチャード・タトル。83歳のいまま精力的な活動を続けるタトルが語る、アート・アーティストの役割、そしてそのあるべき姿とは？

文・撮影＝中島良平

2025.5.15

save



リチャード・タトル



大きい画像で見る

## 私たちは井戸のようなもの

——小山登美夫ギャラリーで7年ぶり5回目となる個展です。

アーティストというのは、いや、人間全般かもしれませんが、人生をかけて長い道を歩き続けている存在です。その途上に山があり、海があり、つまり、自分にとってのチャレンジが生まれます。私はいま83歳です。人生のステージごとにいいことも悪いこともあったが、いい生き方をしてきたと思っている。いいことも悪いことも含めてパーフェクトな世界を生きてきて、すべてを自分のアート作品に注ぎ込んできたと言えるでしょう。いまになってわかったことです。

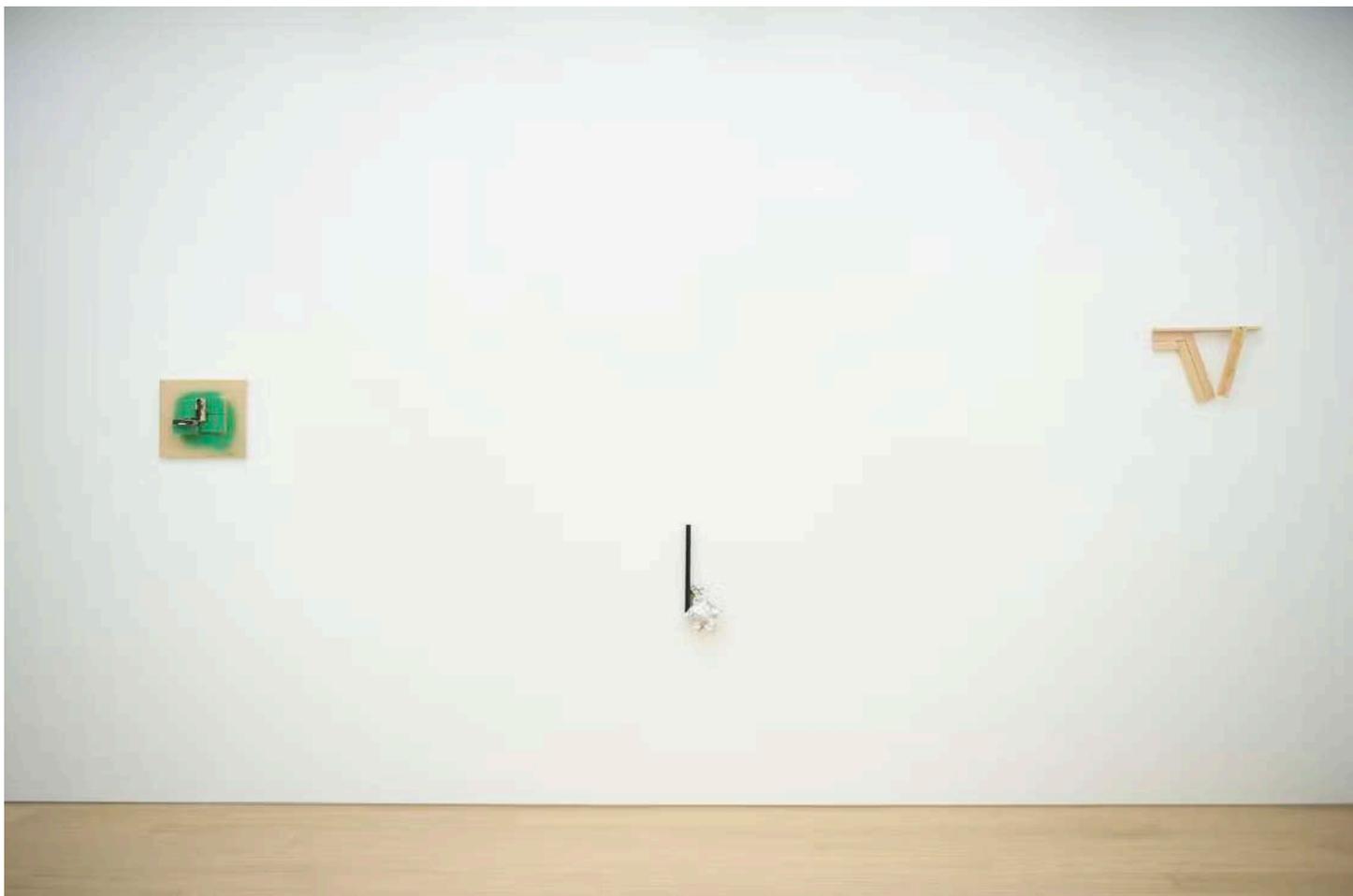
そして、面白いことに最近気がつきました。私たちは井戸のようなものであり、その奥底にある何かが表面に姿を現すまでには十分な時間が必要なのだということに。そうして、適切なタイミングがやってくると、その井戸の底にあったものが表面に上がってくる。80歳を超えてそんなことに気がつきました。



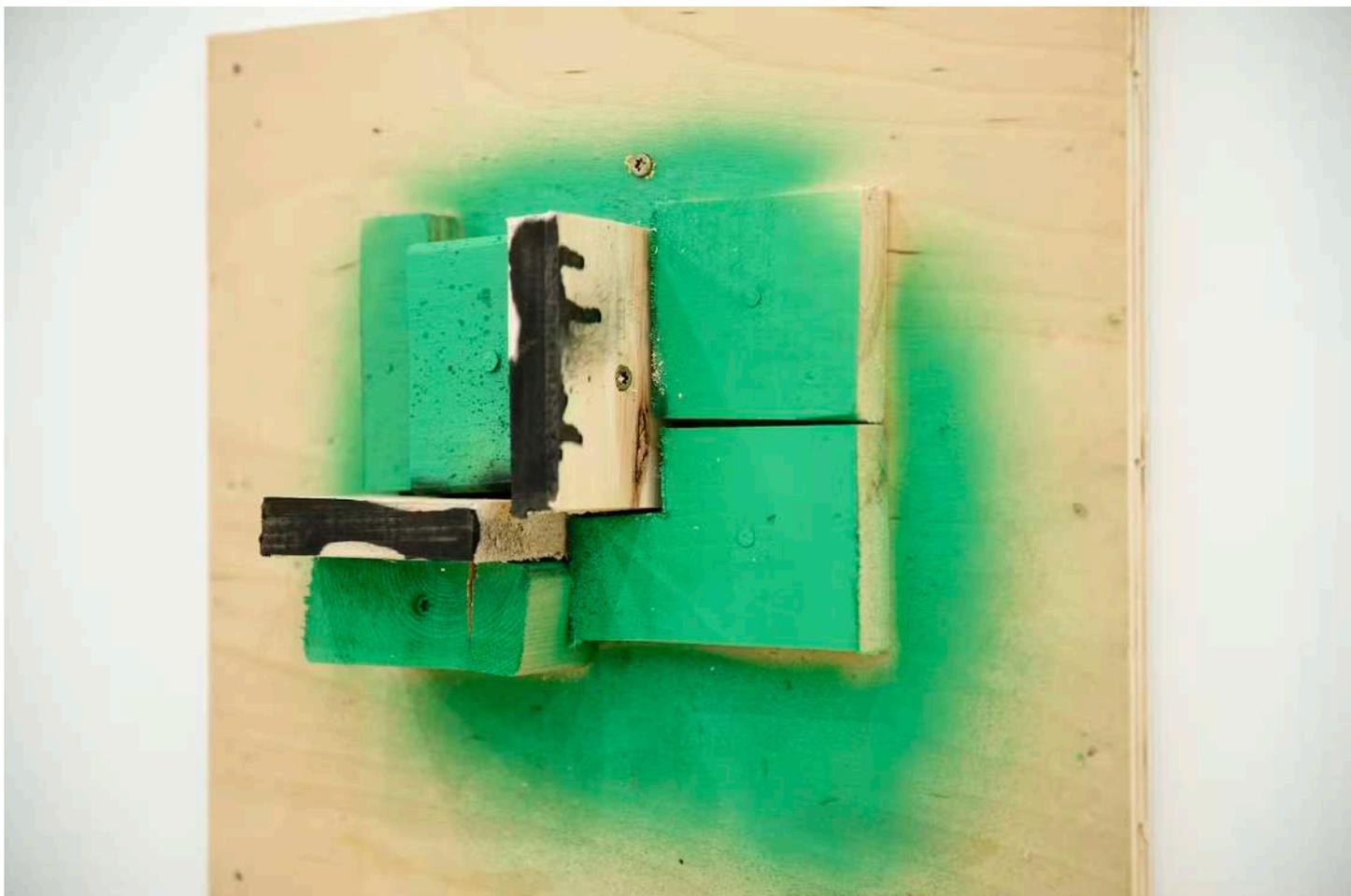
展示風景より

——そうした気づきとともに、精力的に制作を続けられていることが今回の個展からも伝わってきます。数字を、しかも日本語の数字である「三」「四」「五」を用いて展覧会タイトルを「San, Shi, Go」とした理由を教えてください。

数はインターナショナルなものだと言えます。そのいっぽうで、文化ごとに異なる根つき方をしているものでもある。その両面性をもつ数字を扱うことで、私は真実の世界へと近づいていくことができると感じました。数字が連れていってくれるのです。このように言う人がいるかもしれませんが、自分が生まれ育った文化以外は、自分の文化だと言うことはできないと。そして、自分に起こっているのと同じ問題が、自分とは離れた文化のもとで起こっているのを知ったときに問題が起こります。そこには葛藤が生まれるでしょう。それは自然なものです。だが、そこにアートがある。アートの必然性はそこにあると言える。世界には解決のためにアートが必要な問題があるからです。



展示風景より



展示風景より、《三 3》(2024) 部分

## INTERVIEW

## 83歳のリチャード・タトルが語る「アーティストはどう生きるか」【2/3ページ】

2025.5.15

最初から読む

save

## 「情報を伝えることがアートの役割ではない」

——つまり、数というのは絶対的な概念として割り切れるものようでありながらも、そこにニュアンスなど揺らぎの可能性をはらんでいることが表現されているのですね。あらゆる領域で、絶対的な何かが存在すると考えることの危険性を示唆する作品だと解釈しました。

説明すると複雑になってしまいますが、実際の意味においてはシンプルなんです。アートというのは根源的なものであり、アートが存在することによって私たちが抱える最大の問題も解決できるはずです。私がアーティストとして社会に何かを発信できているのだとしたら、それは本当に幸せなことです。人間という種に対して、人間という種の健康に対して何かができているのだとしたら。

私たちの多くは、あるひとつの文化のもとに生まれています。そこに、異なる文化がもつパースペクティブを取り入れることができ、理解を広げることができたら、文化同士の豊かな関係性の構築につながるはずです。アートには、そうした役割を担える多面性があり、アートを通じて人々に動力を生み出せるはずです。アートにはそれだけのエネルギーがある。情報を伝えることがアートの役割ではありません。

私がスイスでドローイング作品を集めて個展を開催したとき、オランダから友人がやってきて印象的だったことがあります。彼は一切、視覚的に作品を見なかった。ただそれぞれの作品からエネルギーを感じてくれた。それが私は本当に嬉しかった。私の作品が、その友人のスピリットにエネルギーを与えたのだから。私はそういうものをつくりたいといつも思っています。人生における最大の喜びであったり、人生の意義であったりに触れられるような作品です。



展示風景より、《二 2》(2024)



展示風景より、《十四 14》(2024)

——タトルさんはそれこそ、これまでの活動において誰かの人生に影響を与える作品を多く手がけてきたはずですが。

私は自分が誰かから人生とは何か、生命とは何かと問われたら、すごく些細なものだと答えるでしょう。例えば、道を歩いていたら雨が降ってきて、雨の滴が肌に落ちたら、その瞬間に特別なものを感じることがあります。すごく些細なことなだけで、ふとそこに起こった何かを「イベント」のようなこととして感じるんです。それを「受信者」として見逃さないようにしてきました。最小の出来事から、最大の何かを感じる瞬間がある。私はそこに興奮を覚えます。

しかし、世界の物事を、大きさの違いで見る必要はないようにも思います。どちらの方が大きいから優れているとか、そうした視点はいらなのではないかと。私はネズミより大きく、ゾウよりも小さい。そんなことはあまり重要ではないでしょう。今回の個展でもっともラディカルでオリジナルなのは、その視点を提示していることだと思います。



展示風景より、《二十三 23》(2024)



展示風景より、《十三 13》(2024)

次のページ

[良い詩と思える作品をつくり続けていきたい](#)

< 1 2 3 >

## Profile

### Richard Tuttle

1941年アメリカ、ニュージャージー州生まれ。ニューヨークとニューメキシコを拠点に活動。ハートフォードのトリニティ・カレッジで哲学と文学を学び、63年に卒業。65年にニューヨークのベティ・パーソンズギャラリーで初個展を行い、75年にホイットニー美術館で個展を開催。これまでの主な展覧会として、2005年から07年までサンフランシスコ近代美術館、ホイットニー美術館他アメリカ国内で大回顧展「The Art of Richard Tuttle」を開催。14年にはテート・モダンとホワイトチャペルギャラリーで個展「I Don't Know, Or The Weave of Textile Language」を同時開催した。国際展では、ヴェネチア・ビエンナーレ（1976年、1997年、2001年）、ドクメンタ（1972年、1977年、1987年）、ミュンスター彫刻プロジェクト（1987年）、ホイットニー・ビエンナーレ（1977年、1987年、2000年）などに参加。その作品はニューヨーク近代美術館、メトロポリタン美術館ほかアメリカの主要な美術館、ステデリック美術館、テート・モダン、ボンピドゥー・センター、ルードヴィヒ美術館、国立国際美術館（大阪）などに所蔵されている。

## Information

### リチャード・タトル「San, Shi, Go」

会期：2025年4月4日～5月17日

会場：小山登美夫ギャラリー京橋

住所：東京都中央区京橋1-7-1 TODA BUILDING 3F

電話番号：03-3528-6250

開館時間：11:00～19:00

休館日：日月祝

料金：無料

## INTERVIEW

## 83歳のリチャード・タトルが語る「アーティストはどう生きるか」【3/3ページ】

2025.5.15

最初から読む

save

## 「良い詩と思える作品をつくり続けていきたい」

——展覧会における来場者とのコミュニケーションをどのように想定されますか。

劇場のようなものだと言ってもいいかもしれません。舞台があり、客席との間にプロセニウム（舞台開口部）があり、その向こうに客席があります。舞台と客席とのコミュニケーションが続くと、やがてプロセニウムが消え、舞台と客席が一体化する。この展覧会では、壁にかかった1点の作品が向かいの壁の作品に語りかけ、別の作品が別の作品に、その作品が別の作品に、というように作品同士の対話生まれている。スペースに対話生まれるように制作した展覧会です。それが成功していたら美しいと思っています。

——そこに観客が取り込まれ、作品との対話生まれ、タトルさんのメッセージを受け取る。美術展の理想的なつくられ方だと感じます。

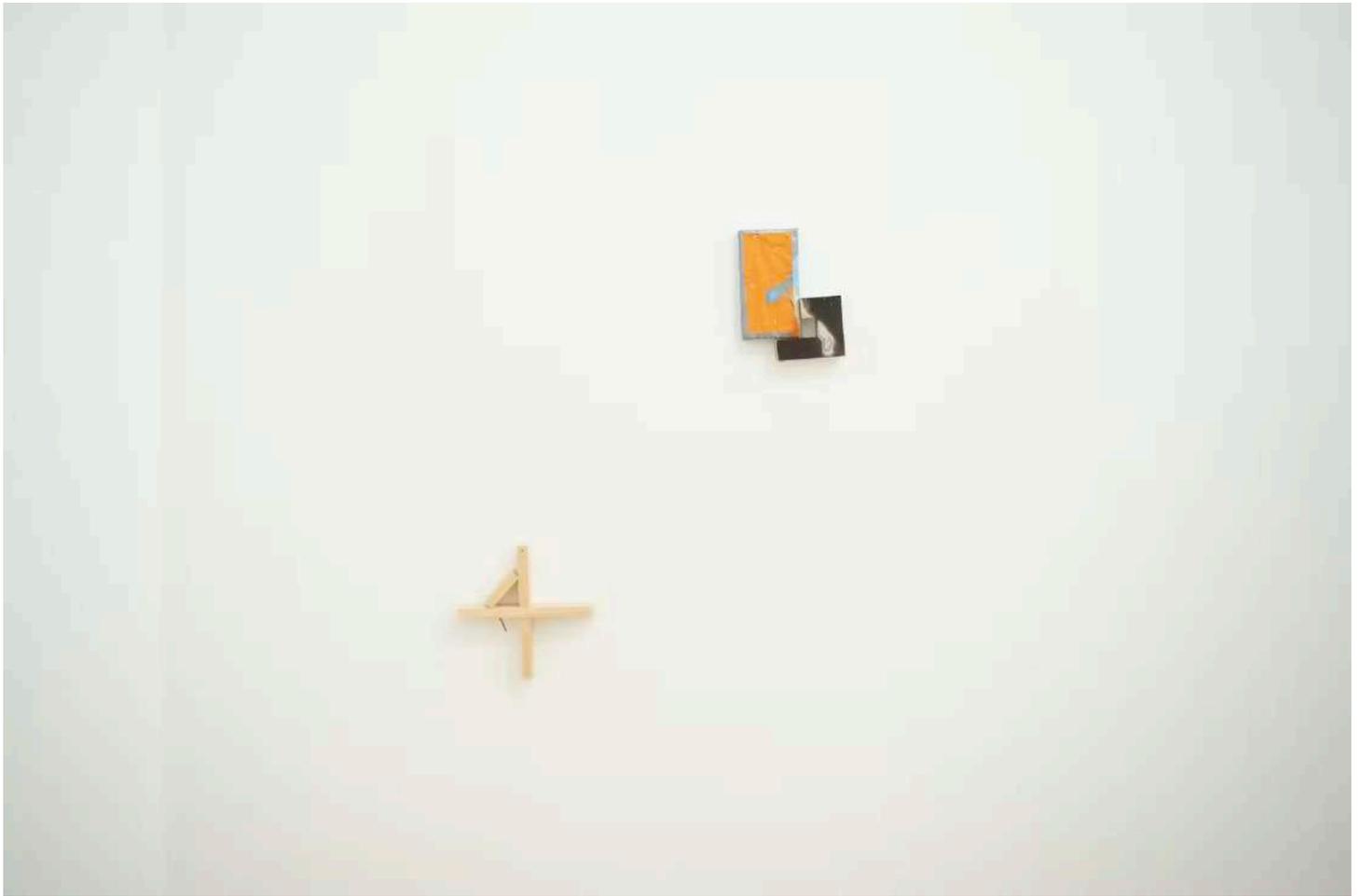
アートというのは根源的なものであり、人間が最初に発明したもののひとつだと考えています。それも良い理由で発明したものです。何か問題が起こったときにどう向き合うか。その解決に向かうために生み出されたのが、アートではないでしょうか。現代アーティストはつねに、そのようなアートの原初に立ち返って考える必要があると思います。私たちが知っている唯一のことは、私たちはまだ何も知らないのだということ。そうした謙虚な姿勢が私たちには必要なのです。

美術手帖 supported by  
GMOクリック証券

Q | PREMIUM | MAGAZINE | EXHIBITIONS | ARTISTS | MUSEUMS / GALLERIES | ART WIKI



展示風景より



展示風景より

——タトルさんが何かにインスパイアされ、それをかたちにすることで鑑賞者とのコミュニケーションを試みる。

インスピレーションは啓示のようなものとも言えるかもしれません。それは様々なことを考え、様々な方向からやってくるものです。アメリカにはネイティブ・アメリカンがいます。彼らは究極的に進んでいる存在です。強制的に居留地に住まされていますが、その居留地の土地は生産性が低く、水にも乏しく、アメリカでももっとも貧しい土地だと言えます。不当なことだと言えます。しかしネイティブ・アメリカンの人々は、その果てしなく続く荒野に美しさを読み取り、そこに住むスピリットを感じ、生きるためのエネルギーとしている。人は物質によって生きているのではないということを体現しているのです。

——人はパンのみに生きるにあらず、という聖書の教えに通じるものがありますし、環境との究極的な共生のかたちだとも感じます。

ある人はこう言います。「私は自然に対して自分を開くことができていない。もしもっとオープンになることができれば、探しているものが見つかるだろう」と。それも人生の途上で見つけたひとつの気づきだと思います。私はいま83歳ですが、この歳までいくつもの気づきと出会い、それを詩に表現してきました。そう、ここに展示されているすべての作品は、詩のようなものだと言っていいと思います。良い詩には、ユーモアやジョークも含まれるものです。私はそんな要素を込めて、良い詩と思える作品をつくり続けていきたいです。



展示風景より、《十六 16》(2024) 部分

&lt; 1 2 3

## Profile

### Richard Tuttle

1941年アメリカ、ニュージャージー州生まれ。ニューヨークとニューメキシコを拠点に活動。ハートフォードのトリニティ・カレッジで哲学と文学を学び、63年に卒業。65年にニューヨークのベティ・パーソンズギャラリーで初個展を行い、75年にホイットニー美術館で個展を開催。これまでの主な展覧会として、2005年から07年までサンフランシスコ近代美術館、ホイットニー美術館他アメリカ国内で大回顧展「The Art of Richard Tuttle」を開催。14年にはテート・モダンとホワイトチャペルギャラリーで個展「I Don't Know, Or The Weave of Textile Language」を同時開催した。国際展では、ヴェネチア・ビエンナーレ（1976年、1997年、2001年）、ドクメンタ（1972年、1977年、1987年）、ミュンスター彫刻プロジェクト（1987年）、ホイットニー・ビエンナーレ（1977年、1987年、2000年）などに参加。その作品はニューヨーク近代美術館、メトロポリタン美術館ほかアメリカの主要な美術館、ステデリック美術館、テート・モダン、ポンピドゥー・センター、ルードヴィヒ美術館、国立国際美術館（大阪）などに所蔵されている。

## Information

### リチャード・タトル「San, Shi, Go」

会期：2025年4月4日～5月17日

会場：小山登美夫ギャラリー京橋

住所：東京都中央区京橋1-7-1 TODA BUILDING 3F

電話番号：03-3528-6250

開館時間：11:00～19:00

休館日：日月祝

料金：無料